

危機と教育

鱈坂 二夫

ブルームルドは現代の世界的危機を卒直に認め、その解決に対する教育の責任を強調して次のように云う。「教育の第一の課題は、民衆自身の文明を地上に樹立して、これを構成し、支配する満足を含めて、民衆の要求一即ち、所有し、計画し、享受する一要求の最大の満足を、彼等自身で達成させるように、世界の文化の再建を援助することである。」¹⁾ 彼によれば、人類はいま、絶大な危機に当面している。戦争と平和、経済不況、……が現存し、政治、経済、文化の諸問題が、それをめぐって、錯雑した様相を呈している。即ち、戦争と不況とは、保守的、反動的な哲学が救済出来ないほどの無数の害悪を惹起している。科学は、戦争の一つの道具として原子力の武装に向つて未曾有の進歩を示し、それは科学自体を含めて、近代文明を完全に破壊することが出来る。また不況は、貧困と疾病を生み出すのみでなく、恐怖、憎悪、冷笑、圧迫、禁制などの、より陰險な社会心理的の疾病を生み出している。この疾病の社会的結果は、仮装しつつあるファシズムに変わり得る大きな危険を孕んでいる。この様な状態の下では、我々の多くは、その取るべき態度を失っている。そして、その態度を再び発見させる羅針盤の必要は、かつて最大の危機の時に哲学者に挑戦したように、現代の哲学者にも挑戦していると云うことが出来る。

このような時に、「哲学の目標は、新しい道を拓き、新しい機械を作り、新しい制度を立てることに苦闘する探険家に、方向を指示することであつて、それらの新しいものは、彼等に先行し、彼等を刺戟した思案的な vision を否定するか、或はそれを立証するのである」²⁾ この vision の否定や立証は、具体的に、常に歴史の事実に対する、洞察、実験、論証となつてあらわれる。そのような場合、ややもすると解釈や説明に陥り易い行方を避けて、改造主義者は常に積極的で、建設的な計画性を保持する。「哲学者の責務は、経済学者や、政治学者と協力して、合理的な文化を作り、また、自然科学者と協力して、自然科学者の発見に対して、社会的責任をとることにある。」³⁾ 改造主義の哲学は、この意味に於て、現代の問題の解決を目指し、その特徴は、課題に対する診断と処置の革新性にあると云われ得るであろう。彼等は、将来に向つて、原理と制度とを完全に变革することのみがそれを解決すると一かつて危機の時代には常にそうであつたように一強調する。改造主義は historic philosophies of vision に立つている。そして、その vision は明らかに、過去及び現在の歴史上の實在、証明された経験の成果の中から生れ出る。

ここに教育に対する、積極的な期待が登場する。人類は、その当面する危機の克服を、先ず第一義的に教育の力によつて果たさなければならない。教育こそは、現在、人類に課せられた最大の課題であるとい得るであろう。教育の目標がこの課題との関聯に於て決められ、内容も方法も、社会再建の具体的地盤に立たされる。教育の哲学は、先ずこのような指針を与えるであろう（教育紀要、2巻参照）。

この場合、注目すべきことは、個人と集団との関係についての、すぐれた配慮である。そこでは Nieb-

uhr, R. の moral man and immoral society に近い立場が認められ、このような社会的基盤が social reality の第一の特徴としてあげられる。改造主義の教育の哲学の第二の主要な問題は、歴史の本質と機能についての深い関心と解釈である。そこでは、すべての哲学は、歴史の表現、従つて、現代の表現として考えられ、歴史は、まさに実在の根本的事実として受けとられている(紀要2巻参照)。このように歴史を実在と見る立場は、従つて将来をも、また、実在として見ようとする。

このことから、次の主張、即ち、実際の経験 practical experience の為めには、過去のみでなく、将来もまた real であるという主張の理由が生れる。我々が常に現在に関係していると云う時でも、我々は、また、同時に、将来にかかはっているのである。或る意味では、将来こそは、現在よりも、遙かに真実であるであろう。将来は、過去と同じく、一瞬にして過ぎ去る現在の瞬間が与えることの出来ない纏りを与える十分な連続であるからである。一時間の講義も、開始後の各瞬間には、すでに話したこと、これから話すことの二つを含んでいる。この二つは現在の講義にとつては欠くべからざるものである。この一例は、実在としての将来の他の特性を示す。まとまつた講義とは、結論の諸点が、冒頭の諸点の意味に扶けられ、また扶け合うように、これらの諸点が組織されている講義である。そうして、このことと同じ連続は、日常の実際にもはたしている。即ち、家を建てる人は、基礎の上に、上層を加えて行かなければならないが、その基礎の大きさと力は、やがて作られる上層の設計図によつて決定されるのである。過去と現在の意味が、将来の意味を決定すると同時に、将来の意味が過去と現在の意味を決定するのである。

我々の生活する現在が、常に過去と未来とを含むものとすれば、我々が現在経験する、政治、経済、教育その他の事象は、我々の為したこと、我々が今後に於て為すであろうことが、常に、我々が現在為しつつあることに、あらゆる瞬間に影響していることと、似通つた関係にある事象なのである。

改造主義者の将来肯定の立場は、しかし、決して過去及び現在の重要性を否定しようとするものではない。例えば、それは、決して過去の解釈としての歴史の伝統的な意味を否定しない。過去と現在とがもつ、将来への決定が重要であると共に、将来のもつ、過去と現在への決定もまた重要であると考えられるのである。将来と結合している文化目標に従つて解釈され、また再評価さるべきものを将来は自由に選択する。この意味に於て utopia 主義は、その根底を、一つの存在論に於てもつと云い得るかも知れない。この原理は歴史のあらゆる時期に通ずるものであるが、現代に於ては、我々は、将来としての歴史の実在性に対して、特に注意を払うべきであろう。それにしても、将来の傾向の分析によつて、人類が進み行く方向の課題に対し、我々が予め、解答し得ると主張するのではない。また、将来の密林が、すでに不思議にも開かれている、と考えるのでもない。その主張するところは、「あるべき将来」を知ることは「あり得る将来」を知ること必要であると云うことである。

このような将来肯定の立場から、目標追求 goal seeking の課題が解かれようとする。

この原理に関しての実際的な問題は、二つの点、即ち我々の social reality の分析の結果と、我々が現在、歴史の岐路に直面し、そのために、我々は、自己自身の態度決定を、従来よりも一層、強い確実さを以て熟慮しなければならないという結論から出てくる。問題解決の経験という果てしなき方法は、その心理学的な効果は認めるとしても、現代のような時期には、実際には、ある危険を孕んでいる。この方法と

その積極的な活動性にもかかわらず、自己満足、即ち、革新的文化が要求する特殊な広い視野の目標でなくて、あいまいな狭い視野の目標に満足するという逆説的な結果に陥る心配がある。

我々に現在必要なのは、我々が行かんと欲する場所を、出来る限り明確に知ることである。それは、それを知ることによつて、我々が行くことを欲しない場所と比較出来るためだけではなくて、それを知らなければ、そこに赴く用意が出来ないからである。若し、行くべき場所を知らなければ、手段は、目的と共に泥中に没し去つてしまうであろう。このことを可能ならしめるためには、時の連続を拡大して、より広い未来の要素を包含することが必要となる。安定した文化は、かなり狭い時の連続に満足することも出来るが、しかし、現代の如き文化は、決してそれに満足することは出来ない。危機の時代に必要な目標は、更に視野の広いものでなければならぬ。手段と目的の過程が、かりに、心理的経験と一致するとしても、それが明日に有効であるためには、範囲は広く拡大され、目的と手段とが大胆に形成されなければならない。

現代文化の目標を明確にすることの必要から、改造主義者は、人間性の到達点を明確化することの緊要さを主張する。例えば、Fourier が感覚と魂との根本的慾望を分け、更にそれを調和して、自我的・社会的 egoistic and social なすべてを支配する衝動を考えた時、彼は正しい軌道の上にあつたのである。Marx と Engels は、食物、住居、衣服、健康などの生活の必要が人間の有力な目標であつて、それが長い間否定されると、烈しい社会的爆発を生ずることがあるということを主張し、精神病理学者 Freud は、愛に対する強力な欲求を強調し、人類学者である Malinowski は、その自由の分析に於て、統制、能率及び人間と自然環境との支配力の要求として、自由を考察した。社会心理学者 Lewin は方向と大きさの二つをもつ力の場を推進して need-like tensions の説を立てこれを実験的に立証しように試みた。このような目標の追求は、絶えざる人間の努力であり、means-ends process は、growing 以上のものとして考えられる。しかも、その目標は、しばしば他の哲学の立場から云われるように、永遠の彼岸にあるのではなく、人間の協力的努力を中心とした目標として、即ち、social consensus により（紀要 2 巻参照）打ち立てられた目標として、従つて、十分な実現の可能性と計量性を含みもつたものとして理解される。従つて seeking は、seeking for であり、growing は growing for でなければならぬ。

しかし、一体、何ものかに向つての追求は、如何にして可能になるであろうか。目標追求を可能にするものは何であろうか。この課題に対する改造主義者の解答は prehension についての分析によつて与えられようとする。prehension と apprehension は Whitehead によつて好んで用いられた言葉である。prehension とは、natural events の統一をもたらし、有機的全体性を把握する力であり、それは apprehension の先きにあり、且つ、後につづく意識の統一の全体性として使用されている。apprehension は、これに対して、事柄を分解して意識し、事柄の構成部分を理解する力である。例えば、時間は、その理解の前に、また理解の後にprehendされる。即ち、第一義的には duration であり、continuum であるが、第二義的には、時計の針によつて示されるように、互に連続する瞬間に区別して認められるのである。時間の prehension によつて見られた意味は、理解された時間の意味が真であるように、

またそれも真である。prehension は apprehension の不可欠の基礎なのである。このように考えると prehension が、直観的過程 intuitive process に近い性格をもつことはうなづかれることであるが、しかし直観という言葉は、しばしば、超自然的な、神的原理を支持する為めに用いられるので、改造主義者はその使用を避けるのである。彼等は、彼岸的なもの、超経験的なものを信じようとしな

い。

我々がここで重要視するのは、「知識とは、一つの面だけでなく、二つの相互に依存する面があるという考え方である。その一つは、我々の周囲の何処にも、即ち、時間の中に、地球の中に、或は我々に最も重大な人間の衝動の中に存在する prehension の統一と、その二は我々が prehension 自体を認識し、分析する観知の理解である。prehension の概念が一つの統一を把握するだけでなく、また一つの統一と他の統一とを結合するのに重大な役割を演ずることに注目すると、この第一の面は、更に強力となる。Whitehead は Nature is an organic process, necessarily transitional from prehension to prehension と云っている。」⁴⁾ 結合する力としての prehension の役割は、また個人の行動を超えた別の領域にも見出される。prehension が自然のすべての過程に存在すると云った Whitehead の主張が正しいとすれば、文化と称する社会的自然の中にも、それは存在するからである。

prehension は、このようにして、未来との関聯に於て、prehended culture を想定することが可能である。この意味で、そのはたらきはプラムメルドのいわゆる unrational に近い力である。ここで解される unrational は人間の、知的、合理的な能力によつては把握出来ないものに浸透し得る能力である。改造主義者はこの unrational を正当に認めようとする。彼等は utopia や vision も社会的に承認され、科学的に検討されると同時に、prehend され、unrational なものによつて inspire されなければならないと述べ、また emotion による基本的な支持の必要を説こうとする。この場合 unrational の原理の背景をなすものは、Freud の心理学であることに注意しなければならない。id, ego, superego の解釈がそれである。

私はここで改造主義の論点に、私なりの疑をもたざるを得ない。現代の危機を解こうとして、教育に対する期待を深めることは、確かに認められていい。そうして、その教育が、近代的生産人の育成や、高き教養の啓培を目指し、特に性格形成の原理として、集団力学の原理を採る立場などは、social consensns による社会的知性の陶冶とともに、人々に満足を与えるに十分である。しかし、問題が、危機的であり、従つて教育課題の解決が、社会課題の解決と極めて近く関聯するだけに、prehension や unrational や emotion などはたらきによる調和、統一について、より深い検討が加えられなければならないのではないか。私は、芸術性のもつ、危機に対する役割を思うのである。ここに芸術性と云つたのは、かつて Shiller が、その「美的教育についての書簡」の中で、巧みに教えた立場にも近く、また Humboldt が教えた個と会体との調和にも近い。異質的なものの調和には或る意志的な決断と、美的統一と、更に加えるならば、愛による合一の世界が描かれなければならないのではないか。改造主義のとなえる utopia, vision は、そのようなものの力を媒介として可能であり、目的の設定の具体化もまた、追求 seeking のもつ動性もそれによつて可能なのではないか。(しかし、これはこの小論の仕事以上のことである。) 教育学

教育学について：池田

のあり方をこのような立場に立つて考えてみたいと、私は思うのである。

(1) Brameld, T., *Patterns of Educational philosophy*, (1950) p. 393.

(2) Brameld, T., *op. cit.*, p. 396.

(3) Brameld, T., *op. cit.*, p. 408.

(4) Brameld, T., *op. cit.*, p. 446.

教育の皮肉

— 教育は宙返りする —

池 田 進

ひとはひとから教えらるるままにのみ進み行くものではない。教えられるということは服従と抵抗との無意識な共存次元に立つことである。終戦直後日本人の殆んど全部は民主主義者になり得た。しかも彼等はその殆んどが子供時代を所謂反動的教科書や教育勅語の氾濫する時代に何のいきどおりも、何の矛盾も感ぜずに育つてきた人達である。愛国の歌人が一夜にして革命の斗士に生れ変わる、正しく奇蹟である。大体にしてから人間はいとも簡単にこうした奇蹟をやつてのけるものである。子供の時代に教育勅語に何等の感情的刺激も受けずに生きてきた人が、今では教育勅語の悪口を云つて生きているのである。私は何もこうしたことに価値的評価を下しているのではない。世の中はこんなものだと云つているに過ぎないのである。教育勅語は正に明治20年代が生んだ教育政策の宣伝文である。そしてこの宣伝文におどらされて、日本国民は戦争へ敗戦へとかり立てられて行つたと今では一般に信ぜられている。果して事態はそんなに簡単に割り切れるものだろうか。戦争と関連することについては、軍事制度についての徹底的分析が必要なのではないか。教育勅語に凡てを律しられたのであつたならば、今日の大人達が殆んど全部民主的に得意然として生き、我が世の春を讚美していることがまことに奇妙なことではないだろうか。私達の先輩或いは私達自身、教育の皮肉の微笑の中に育つてきたことをふりかえつて、教育の性格を理解する手引きとしたい。

明治の指導者達が智慧をしぼりにしぼつて、明治23年10月末教育勅語は発布されたのであるが、当時支配者層は挙つて、これをほめたたえたものである。例えば時の帝国大学総長加藤弘之は23年10月3日天長節に当り、「吾天皇陛下は夙に教育に大御心を用いさせられ登祚以来屢々勅諭もあらせられしが、今設更に唯今拝読せし所の勅語を下し給へり。本官教官学生等と共に謹て聖旨を奉戴して将来益々勉勵従事せざるべからず。抑々今般の勅語たるや教育社会の全般に関して下し賜いたるは申すまでもなきことながら、吾帝国大学学生の如きは最高等の教育を受くる者たれば勢い教育社会全般の師表模範たるものと云わざるを得ず、果して然らば其責任の至大至重たる亦固より論を俟たざるなり、本官去月18日に於て学生生徒に